

<エッセイ>京都えらい

著者	鄭 在貞
雑誌名	日文研
巻	58
ページ	2-8
発行年	2017-03-31
URL	http://doi.org/10.15055/00006506

エッセイ

京都えらい

鄭 在 貞

法古創新の歴史博物館

今、京都が人気である。二〇一五年、京都市の観光客の数は五六八万人で、三年連続で最多を更新した。政治の混乱に重ねて経済さえ低迷気味のソウルの一市民として羨ましい限りである。

京都は一一〇〇年もの間、日本の首都だったうえに、外国の侵攻もなく、古色蒼然とした街の景観が比較的よく保全されている。だからといって、京都は歴史の重さに踏み付けられた老いた都市ではない。「ポケモンゴロ」を創案した任天堂や新素材を開発した京セラなどの先端企業の数多い若い都市である。人口は東京の一〇分の一にすぎないが、東京よりも多くのノーベル賞受賞者を輩出している。京都は法古創新、すなわち古きものを消化し尽くして、新しいものを生み出す革新都市なのである。

私は二〇〇五年に一年、二〇一六年に三ヶ月の間、京都の桂坂にある国際日本文化研究センターに外国人研究員として滞在した。東アジアにおける鉄道の歴史と文化を相互参照の観点か

ら研究するという名目であった。その成果の一端は、日本で『帝国日本の植民地支配と韓国鉄道』などで出版された。修道院のような日文研の静かな環境は、誰もが研究に没頭してしまう魔力を持っている。

私は週末や休日に度々山の修道院から抜け出し、京都を隅から隅まで探索した。そのときに気付いたのは、京都は歴史を活力の基盤とし、伝統を重んじながらも、常に新しい文化を拓く創造の気風を持っているということだった。つまり、京都は危機に際し、古い文明から新しい文明を作り出す文明転換にすぐれた。

韓日関係史の生きた展示場

もう一つ、驚いたことがある。京都のあちこち散らばっている宮闕、寺院、神社、景勝地、大学などは、韓国とのゆかりが深いという事実であった。韓日関係の歴史を研究し、教育してきた私には京都は生きた博物館であり、展示場であった。私は京都を探索しながら感じて感じたことを書き留め、韓国で『京都から見た韓日通史』（改訂増補版、『ソウルと京都の一万年』）を出版した。京都の来歴、市街、都城、宮闕、寺院、神社、景勝地、大学などを素材にして記述した韓日関係の歴史物語である。

狭い海を挟んでいる韓国と日本は、古代から現代まで、お互いに密接な関係を結びながら、それぞれ個性豊かな文明を発展させてきた。韓国は日本の古代文明に大きな刺激を与え、日本は韓国の近代文明に多大な影響を及ぼした。文明の交流は平和的に行われたこともあったが、強圧的に行われたこともあった。紆余曲折を経て、韓国と日本は、人種・文化などの面で最も近い隣国となった。米国の著名な文明史家ジャレッド・ダイヤモンドは、『銃、病菌、鉄』と

いう名著で、このような韓国と日本を「幼年期を一緒に過ごした双子兄弟」に例えた。歴史認識をめぐる葛藤と対立を繰り返している韓国と日本に、世界文明の次元で韓国と日本の親近性を再評価するよう促したものである。私は彼の忠告に百パーセント同意することはできないが、京都の歴史の中には、彼の見解に賛同したくなるような証拠があまりにも多い。私はそのような現場を自ら訪ね歩いて前の本を執筆したのである。

京都の歴史と文明交流

京都は、桓武天皇が平安京に遷都した七九四年以来、日本の政治と文化の中心地であった。幕藩体制が成立して権力の中心が鎌倉や江戸に移った時代もあったが、明治維新後、天皇が東京に移居した一八六九年まで京都は日本の首都であった。そのおかげで、京都には今でも一六〇〇軒の寺院と四〇〇軒の神社が軒を連ねている。だが、数回の内乱と火災などで都市の大半が燃え、破壊されたので、平安時代はおろか鎌倉時代や室町時代の建物さえあまり見当たらない。京都は平安時代の寝殿敷地に幕府時代には武家邸宅が、そして明治維新後は商街建物が建てられた。このように歴史に翻弄されつつも、骨と肌を変えながら京都は「日本人の心の故郷」の座に昇り詰めた。

今日の京都は、豊臣秀吉が再編成した都市構造に基づいているが、京都というと平安京を思い起こすのは碁盤のような町並みが平安京に由来するからである。直角に交差する街路こそ京都に残った平安京の痕跡だといえる。平安京は日本の首都であった藤原京、平城京、長岡京はもちろん、唐の長安と北魏の洛陽、新羅の慶州、渤海の東京なども参考した。したがって平安京は日本の古代宮都の完成形といえることができる。

平安京には、韓国から渡来した人物の面影が濃く滲んでいる。彼らは京都の山野を開き、首都の基盤を創った。そのため、廣隆寺、松尾大社などの古くて大きい寺院や神社などには、渡来人との因縁が色濃く残っている。圓仁などの高僧は新羅將軍張宝高の船団を利用して唐に留学した。京都一帯は古代韓国との文明交流を知らせる遺跡が非常に多い。

平安京は一一世紀を前後して京都という名前を持つようになった。天皇の朝廷が弱体化されて武士が政権を握ると、武士政権の拠点である鴨川の東部が新しい市街地として浮上した。また東山、北山、西山一帯に寺院が多く建立され、京都は仏教振興の中心地となった。東寺と西寺しかなかった京都に民衆が施主となり、参拝する寺院が出現したのだ。歳月とともに寺院は爆発的に増加し、京都は宗教と日常が密着した新しい景観を持つようになった。

京都の葛野山に高山寺がある。多数の文化財を保有している古刹である。住職明恵上人は新羅の高僧元曉と義湘を欽慕し、彼らの修行の様子を絵に描いた。この絵巻に描いている義湘と善妙娘子の切ない愛の物語は韓国の名刹浮石寺にもひそめられている。中世にも韓国と日本の知性は、時間と空間を越えて交感し合っていたのだ。

中世の京都は、古代の国営産業に従事していた多数の商工人たちが、平安京の作動システムが崩壊したあと自ら独立して、共同組合を結成し、営業権益を守ったため、日本最大の商工業都市に成長した。経済の発達は文化の隆盛を促進し、民衆の行事である祇園祭りが誕生した。

しかし、京都は一五世紀半ばに応仁・文明の乱が起こり、致命的な打撃を受けた。回復までに二五年の歳月がかかったが、過去の栄華を取り戻すことはできなかった。京都は二つに割れ、上京と下京の間に約二キロの田園地帯が生まれた。まるで双子の都市のような都市景観は、約一世紀も続いた。京都の住民たちは活力を取り戻すために祇園祭りを盛大に挙げるな

どし、力を注いだ。

豊臣秀吉は上京と下京の空地をなくし統合する大事業を行い、周辺を土壁で囲んだ。彼は街を東西南北に区画し、市内と郊外を洛中と洛外に区分した。また、中心部に御所を再建し、その隣に自分の居場所として派手な聚楽第を新築した。彼は権力を振るって、散らばっていた寺院を寺町に集め、有事の際には防御線としての役割を与えた。

京都には、豊臣秀吉の朝鮮侵略に関連した遺跡があちこちに残っている。豊國神社の前には朝鮮人の耳と鼻を刺って埋めた耳塚があり、椿寺には朝鮮から持ち帰った冬柏が茂盛である。朝鮮から連行された被虜人である姜沆は伏見で僧侶藤原惺窩に朱子学を伝授し、近世儒学の祖宗になった。

豊臣政権を倒した徳川政権は政治の中心を江戸に置いた。徳川家康は御所を斜めに眺められるところに壮大な二条城を築造して、自分の居場所兼天皇の警戒所にした。徳川幕府は京都の復興を援護したため、一七世紀末京都は巨大な寺院が多く築造され、絹織業などが華麗に発展した宗教・文化・産業の都市として繁栄を極めた。

近世の京都は中国・朝鮮・日本の間で盛んに行われた絹・人参・銀の貿易の最大の受惠地であった。朝鮮通信使の華やかな行列も京都を往来した。慈照院などの寺院には、彼らが残した詩文と絵画が多く所蔵されている。今日の京都の景観には徳川時代に作られたものが多い。近世、権力の中枢は江戸だったが、文化の中心は京都だった。

ところで、京都は明治維新を前後して政治の中心地として再び浮上する。明治維新の舞台がほかならぬ京都だったのである。しかしながら明治国家を誕生させた京都は、住民の抗議デモにもかかわらず、天皇が貴族たちと一緒に東京に移居すると、政治の中心からはずされる。

近代の京都の住民は危機を機会として活用し、失望から希望を産み出した。比叡山にトンネルを掘って琵琶湖の水を引き入れて発電所を建設し、運河を作った。そのおかげで京都は水運が発展し、アジアで最初に電車が走った。西陣などの伝統的な産業においても技術革新が起り、京都は急速に近代都市として発展した。そのうえ、第二次世界大戦でも大きな被害を免れ、京都は「生きた博物館」として生まれ変わった。

近代の京都には日本が韓国を侵略し、また支配した事実を証言する遺跡も多い。三宅八幡宮には韓国合併奉告祭碑が立っており、韓国併合の偉業を祝って伝承する内容が刻まれている。韓国の侵略を企画した元老や支配した総督の別荘も多い。明治天皇の墓を造るときも、比叡山のケープルカーを敷くときも、韓国人労働者が働いた。学校では新しい知識を学ぶために奮闘した韓国人留学生も多かった。京都帝国大学で博士号を取得し、教鞭を取っていた李泰圭と李升基は解放後、韓国と北朝鮮の科学の発展に貢献した。同志社大学で学んだ鄭芝裕と尹東柱は韓国人の情緒を最もよく表現した詩人として称賛されている。

京都の賀茂川の近くに高麗美術館という、在日コリアン鄭詔文氏が私財を投じて作った韓国文化の博物館がある。特に、日本で流通している韓国の美術工芸品が展示され、中には国宝級相当の珍品もあって、京都の文化水準を高めている。彼が西陣の労働者であったり、パチンコの経営者だったこと自体が近現代の韓日関係の歴史を象徴する。

京都のイノベーションから学ぶ智慧

今日、京都では茶道、書道、狂言、京舞など、歴史と伝統が染み込んだ芸能芸術が盛んである。多くの祭りや歳時風俗は、文化観光イベントとして名声を博す。他にも京都は、長年に

渡って研磨した技術を生かし、人間の生活を豊かにする商品を生産する。数年前、ノーベル化学賞を受賞した若い科学者は、京都にある島津製作所の研究員だった。世代を継いで進化する京都の文化には、京都人の自負心と誇りが溶け込んでいる。そのプライドが高すぎて、『京都ぎらい』という本も出ている。

人口一三〇万人に過ぎない京都がどのようにして最高レベルの学問と産業を発展させることができたのか？ その答えは、古いものを活かして新しいものを作り出すノウハウ、つまり自分の文化と伝統を時代の変化に合わせて発展させていくイノベーションにあるということができる。法古創新こそ京都の歴史そのものであり、キーワードであろう。

韓国と日本は、古代から現代まで想像を越えるほど深く広い文明交流を積んできた。そのせいであつて、京都は、歴史に翻弄されながらも文明転換と自己革新を重ね、再生と繁栄の動力を作り出してきた。京都にはそれを雄弁に語る遺跡が数え切れないほどある。京都を訪れる観光客が、日文研で執筆した拙著を読み、韓日関係の広くて深い意味をきちんと理解すれば何よりだと思ふ。京都はえらい都市なのだ。

(ソウル市立大学教授)